

外国人がつくった近代上海・ 多国籍都市の都市文化史研究のはじまり

菊池敏夫

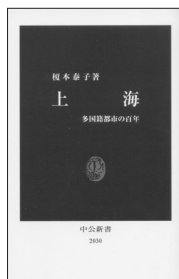
近代上海を「国際都市」という概念で捉えることは広く行われている。それにも関わらず「国際都市」といったとき、私たち日本人は一体どのようなものをイメージしてきたのであろうか。多様な国々の人々が生活し、彼らの文化がその都市の伝統文化と複雑に混ざり合って機能して、それがその都市の大きな特質を作り上げている文化的状況といったような抽象的なイメージをつくるのが精一杯のところであつたらうか。近代上海の研究は従来政治、経済に関するものが多かった。これに対して各国の具体的な文化研究を踏まえてなされるべき上海の「国際性」の検証は立ち後れており、分

かりにくさを残していた。

著者は『楽人の都・上海』（研文出版、

一九九八年）、『上海オーケストラ物語』（春秋社、二〇〇六年）で知られる研究者である。彼女は、非常に多くの国々の人々の存在とその文化的影響によって発展を遂げた近代上海のトータルな姿、歴史的発展のありようを捉える際、どのような切り口を用いるのか。本書は、まず近代上海を「多国籍都市」として捉え、その形成に関係した主要な国々の人々の歴史に一つひとつ分析のメスを入れ、最後にそれらの分析結果を総合しようと試みる。譬えていえば何十本もの異文化という色糸がない交ぜになって形成された「多国籍都市」上海という太い紐を、ひとまずその原初のひと色の糸にまで解きほぐし、その色糸のもつ特質を一つひとつ解明して、つぎに改めてそのひと色の

榎本泰子著
上海



新書判 288頁
中央公論新社 [840円]

糸が近代上海を舞台に、他の多くの色糸と一緒に、いかに「多国籍都市」という太い紐に撚りあわせられていったのかを考察した。ものごとの根本にまで立ち返って歴史を再構成しようとする、一見単純であるが、方法的に正当で、手抜きを許さない丁寧な学問の方法がこの書の明快な叙述のベースをなしており、そのことがこれを読むわれわれに新鮮な読後感を与え、新しい興味をかき立てるのである。これが本書の第一の特徴であり、魅力である。

本書では近代上海に深い関わりをもつた国民としてイギリス人、アメリカ人、ロシア人、日本人、ユダヤ人、そして中

国人が取り上げられている。章別構成は、序章「上海租界の百年」、第一章「イギリス人の野望」、第二章「アメリカ人の情熱」、第三章「ロシア人の悲哀」、第四章「日本人の挑戦」、第五章「ユダヤ人の苦難」、そして第六章「中国人の意志」である。まずこの区分けが「国際都市」の具体的理解を容易にしている。

少し内容に立ち入ってみよう。イギリス人やフランス人は、本国の生活様式をそのまま上海に持ち込んだ。したがってロンドンやパリの流行が上海でも流行することになった。都市建設という角度からみれば、共同租界、フランス租界の街づくりが近代上海の基礎をつくったといつてよく、都市インフラ、建築物などにはイギリス人、フランス人の生活意識、価値観が大きく反映しているという。次いで、著者は「建築のような目に見える部分の検証は容易だが、そこに暮らした人々の様子となるとどうだろうか」（二五頁）と視点を絞り上げていく。上海に暮らす外国人を日々の生活レベルで捉えよ

うとする視点は本書に一貫したもので、本書を読みやすくしている。上海のイギリス租界は植民地の香港とは異なり総督以下の行政官がおらず、中国でもなく、イギリスでもなく、既存の国家に帰属しない「自由都市」であった（三二頁）。それが経済的利益を最優先するイギリス商人にとって最も都合のよいものであった。彼らの日々の生活は料理も娯楽も本国の伝統を受け継いだ。上海のイギリス人の間には大きな身分格差があったが、これも本国譲りであった。

アメリカ人は、第一次世界大戦後からあらゆる領域で投資を拡大し、貿易でもイギリスに代わって第一位となった（七八頁）。彼らはその陽気さやフレンドリーな態度で上海の中国人の前に新しいイメージで登場した。なかでも注目すべきはアメリカの精神が強烈に現れた宣教や教育のジャンルにおける中国人への支援、同情の姿勢であった。聖ジョンズ大学の業績に代表されるような中国の近代化を推進しようとする情熱は経済利益至

上主義のイギリスや拡張政策をとる日本などと比べてはるかに好意的なイメージを与えた（一〇八―一〇九頁）。

この書の今一つの特徴と魅力は、「国際性」のある生活や文化、意識の担い手をイギリス人やアメリカ人、あるいは日本人といった社会集団レベルでだけ捉えるのではなく、それぞれの集団に属しながらもすぐれて個性的な生き方を貫いた個人を取り上げ、その生き方のなかに外国文化の上海における定着の過程を描いたり、確認したりしている点にある。『史記』列伝を意識したかはわからないが、その個人の歴史経験をおしてその個人をとりまく時代の上海の躍動が伝わってくる仕掛けになっている。上記のイギリス人に関する所ではロイター通信のハリエット・サージェント、女性旅行家のイザベラ・バードに語らせ、アメリカ人の所では著作家のヘレン・フォスター（筆名ニム・ウェールズ）に語らせている。女性が多く登場する点も新しい感覚を与えている。

白系ロシア人とユダヤ人を取り上げた第三・五章は本書の白眉である。最初に登場するスタルク艦隊も詳細な調べに基づいている。上海のロシア人のなかには一流の医師、建築家、エンジニアも多く含まれ、その社会的影響力は大きかった。だが、彼らの技量は芸術活動において象徴的であった。「上海にやってきたロシア人の中には、少なからぬ音楽家、舞踊家、画家などがいた。特に音楽家たちはいずれも（中略）革命前から演奏家・教育家としてキャリアを積んでいた者が多かった。彼らが上海租界の住民になったことは、租界の音楽文化に大きな変化をもたらした」（二二九頁）。上海パブリックバンドがブラスバンドからオーケストラへと移行し、工部局交響楽団へと成長する際もフィリピン人に代わるロシア人の増加が上海の音楽芸術の水準を前進させた。上海音楽院の前身である国立音楽院でもロシア人音楽家が教師となり世界的レベルへの飛躍が可能となった。こうして「クラシックでもポピュラーでもま

すまず向上し、上海はアジアでもまれに見る『音楽の都』へと発展を遂げた（一二二頁）。

ユダヤ人難民は第二次世界大戦勃発後、行き場を失い、ビザなし入国のできる世界で唯一の地・上海に到着した。彼らは物質的に乏しい生活環境にあつても音楽、演劇、詩を忘れなかった。彼らのなかでは音楽家の比重が高く、五一二〇人中二六〇人で、多くがウイーンでの活動経験があつた。たとえばヴァイオリニストのオットー・ヨアヒムはクラシックもジャズも分け隔てなく演奏しようとする姿勢をもっていた。国籍不明のダンサー「マヌエラ」こと日本人・和田妙子も音楽に対する彼の気高い精神に感服し、まさに上海でひとまわり大きなダンサーに成長している（二〇八頁）。

第三・五章では上海における音楽芸術の歴史に関する著者の知見が遺憾なく表現されている。さまざまな因縁によって西洋芸術が上海の地に定着していく過程が音楽家の歴史や関係者の回想をとおし

中国発行の日本語月刊総合誌

人民中国

People's China 5月号

 人民中国雑誌社 定価 400 円（税込）
 【年間購読料 4800 円（税込）】

【特集一・日本にある中国企業】ハイアール・ファウエイ・バイドゥ・アリババ・Lenovo
 【特集二】海江田万里インタビュールほか【連載】◆私のしごと◆人の感情を捉える・

デジタル映像企画会社プロデューサー
 ◆長江文明を訪ねて⑤鴻山・二千年以上前の陶器王国◆ぶらり旅 上海⑪上海のホテル◆随想・世界とつきあう⑰「レディファースト」か「お年寄り優先」か◆遼・金王朝 千年の時をこえて⑰「東京」——東北部の外交と貿易の中心◆チャイナ・パワーを読み解く⑳上海万博に登場する日本館◆世界遺産めぐり⑥四川省・峨眉山の「猿居士」はか

『人民中国』は中国で編集・発行される日本語雑誌です。政治、社会、考古、歴史、美術など幅広い分野の最新情報を満載。
 ご希望の方に見本誌を送りいたします。

☎ 03（3937）0300 東方書店

て分かり易くまとめられている。文化や都市も、そして歴史も詰まるところは人間個人なのだ、ということを感じさせられる。

日本人を扱った第四章でのトピックは日本軍の「文化工作」であろう。日本の進んだ文明を遅れた中国に普及させるという意識が強かったため抵抗が強く、租界に蓄積された文化伝統に即した活動でなければ受け入れられなかった。租界の文化的成熟が上海の日本軍の前に大きく立ちほだかつていたのである（二八四―一八五頁）。

本書の第三の特徴と魅力は、外国が近代の上海をつくったのだという著者の見方が鮮烈に表現されている点である。租界都市としての上海を念頭に置いた第一章から第五章までの考察は外国人の積極的な役割を正当に評価しようとする姿勢で貫かれている。租界の「華洋雜居」を舞台に東西文明が衝突融合するのではあるが、それは外国の権力の庇護のものである。第六章は、その外国の文

化的な影響を受けて成長し、新しい上海の担い手となる人々を扱っている。外国文化の作用を受け、中国でも希有な発展を遂げた上海の中国人たちがその近代上海の歴史的環境を近代人としての自己の成長にいかにつぎつぎすることができたかを検証している。上海には中国の他の都市にはないものがあつたのである（二三三頁）。その上海を舞台に自己形成を遂げる人々の代表は一人は蔣介石の妻宋美齡であり、他の一人は作曲家聶耳である。前者は近代の女性と政治との新しい関係を代表し、後者は映画音楽という新しい芸術の世界で初めて名をなした人物である。いずれも近代の上海でしか生まれ得ない存在であり、この新しい中国や上海を代表する存在の活躍をもって本書は締めくくられている。

私は本書に対して一つだけ不満がある。それはこの最後の点に関係している。近代上海では西洋近代の制度が輸入され、上海在来の制度と反発・融合し定着していく過程が見られる。たとえば百

貨店はその一例だが、上海では商品の小売り以外にも都市の娯楽機能や文化機能を担わざるを得なかった。上海に中小資本家層、都市中間層が急増し大衆社会化が進んだとき、外国人中心の都市発展を上げてきた上海には彼らのための娯楽・文化施設とそれを造る資金が不足したからである。その機能にも映画など西洋近代の新しいものと京劇、地方劇など伝統的なものとの融合がみられた。また一九世紀末以降、外国人を相手に経営してきた西洋資本の百貨店は二〇―四〇年代には中国語新聞に広告を載せ、中国人顧客を増やして「中国化」していった。このような文化発展の形が近代上海ではもっと広くみられたのではないだろうか。

（きくちとしお 神奈川大学附属高校）

